

夏目漱石批判予告 2 種

『ころ』 批判

～『『ころ』の意味は朦朧として』 予告

1 / 7 「罪悪という意味は朦朧（もうろう）として」

いずれにしても先生のいう罪悪という意味は朦朧（もうろう）としてよく解らなかった。

（夏目漱石『ころ』）

「いや、ひとつのものも、人によって呼び方がちがうものですよ」とポアロはなぐさめた。

（アガサ・クリスティー『死者のあやまち』）

けれども、このブラウン家の隣人（りんじん）は、いとも巧妙（こうみょう）にもものごとをねじまげるくせがあって、この人にかかると、相手（あいて）は自分がはたして何をいったのか、確信（かくしん）がもてないようにさせられてしまうのでした。

（マイケル・ボンド『パディントンとテレビ』）

「ぼくがことばを使うときは、だよ」ハンプティ・ダンプティはいかにもひとをばかにした口調で、「そのことばは、ぴったりぼくのいいたかったことを意味することになるんだよ。それ以上でもそれ以下でもない」

「ただ、問題は、そんなふうなことばにやたらいろんな意味をもたせていいものかどうか」

「問題はだね。どっちが主導権をにぎるかってこと——それだけさ」

（ルイス・キャロル『鏡の国のアリス』）

「わたしには、イーヨーのおっしゃるいみがわかる。」とフクロがいました。わたしの意見（いけん）はと問（と）われるなら——」

「わしゃ、だれの意見（いけん）もきいちゃおらない」と、イーヨーがいました。

（A. A. ミルン『クマのプーさん』）

その言葉はぞっとするほどいやらしく響（ひび）きましたが、その響きよりも意味のほうがもっとおぞましいのでした。

（ジョージ・マクドナルド『かるいお姫さま』）

みんな、オウムという鳥は、人間のことばを話しますが、たいてい、じぶんがなにをい

っているのか知らないのです。でも、オウムたちが、すぐに人間のことばをしゃべるのは、
——つまりそれが、なんとなくしゃれたことのように思われるからです。それに、人間の
ことばをしゃべるといって、ビスケットをもらえるのをみんな知っていますからね。

(ヒュー・ロフティング『ドリトル先生航海記』)

「人間の話すことがわからなければ、人間なんてどこがいいんだ？」

(ラドヤード・キプリング『ジャングル・ブック』)

「ああ、言葉足りないですね」

「……………。ううん……」

「……………？」

「充分だよ。充分」そう言うと、南は頭から布団をかぶった。

(北川悦吏子『ロング バケーション』)

2 / 7 「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」は意味不明

『精神的に向上心のないものは、馬鹿だ』

○「馬鹿」は不適切？

また、「精神」や「向上心」と「馬鹿」は釣り合わない。

『精神的に向上心のないものは、馬鹿だ』

○「精神的に」→「ない」or「馬鹿だ」

「精神的に」の係る語が決まらない。

『精神的に向上心のないものは、馬鹿だ』

○「精神的に向上心」＝〈「精神的に向上」する「心」〉？

ただし、〈「向上」する「心」〉は意味不明。

『精神的に向上心のないものは、馬鹿だ』

○「に」は〈な〉の間違い？

ただし、〈「精神的」な「向上心」〉でも意味不明。

『精神的に向上心のないものは、馬鹿だ』

○「精神的に」＝〈「精神的」方面「に」おいて〉？

ただし、〈「精神的」方面〉は漠然としすぎ。

『精神的に向上心のないものは、馬鹿だ』

- 「精神的に向上心のないもの」＝〈肉体的に「向上心」があるもの〉？
体育会系は「馬鹿」か。

『精神的に向上心のないものは、馬鹿だ』

- 「精神的に」＝〈「精神的に」しか〉？
意外に、これが真相？

本文。

精神的に向上心がないものは馬鹿だと云って、何だか私をさも軽薄もののように遣り込めるのです。

(夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」三十)

私は先(ま)ず『精神的に向上心のないものは馬鹿(ばか)だ』と云い放ちました。これは二人で房州を旅行している際、Kが私に向って使った言葉です。

(夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」四十一)

『精神的に向上心のないものは、馬鹿だ』

私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上にどう影響するがを見詰めていました。

『馬鹿だ』とやがてKが答えました。『僕は馬鹿だ』

(夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」四十一)

3／7 「この不可思議な私というもの」は意味不明

『こころ』に含まれた文言の多くは意味不明だ。

私は私の出来る限りこの不可思議な私というものを、貴方に解らせるように、今までの叙述で己れを尽くした積りです。

(夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」五十六)

この「私」は無為徒食の中年男だ。名前がないので、『『こころ』の意味は朦朧として』では〈S〉と呼んでいる。〈sensei〉の頭文字。

「私の出来る限り」は、〈今の「私の」力で「出来る限り」〉といった文言を隠蔽する言葉だろう。つまり、〈時と場合によってはもっと解りやすい話が「出来る」かもしれない〉といった可能性を隠蔽する言葉だろう。そして、こうした隠蔽の事実を暴露しかけた言葉なのに違いない。語るに落ちる。

「この」が「私」と「もの」のどちらに係るか、不明。「この」の真意が〈このように〉なら、「この」は「不可思議な」に係る。要するに、「この不可思議な私というもの」は意味不明なのだ。

この「貴方」は無為徒食の青年だ。名前がないので、『『こころ』の意味は朦朧として』では〈P〉と呼んでいる。〈pet〉の頭文字。PはSを「先生」と呼ぶが、その理由は不明。

〈「不可思議な」「ものを」「解らせる」〉は意味不明。「解らせ」られたら、この「もの」は「不可思議」でなくなるのか。あるいは、逆に、もっと「不可思議」になるのか。

Pは、実際に「解らせ」てもらえたのか。不明。

「叙述」とは「遺書」のこと。客観的な〈記述〉ではなく、主観的「叙述」だ。

「己れを尽くした」は〈今の「己れ」として力「を尽くした」〉などの不当な略だろう。これも、〈時と場合によってはもっと力を尽くせるかもしれない〉といった可能性を隠蔽する言葉だろう。語るに落ちる。

「積り」は怪しい。謙遜か。逃げ口上だろう。

「下 先生と遺書」の「と」は〈の〉が適当。「と」である理由は不明。

『こころ』が平仮名である理由は不明。

4／7 偽ドラえもんの「漱石さん」

ルーシー 考えてほしいんだけど… 世の中に悪い人のほうが多いの、
それともいい人のほう？

チャーリー ダレが言えるのさ？ ダレがよくてダレが悪いかってことを
ダレが言えるってのさ？

ルーシー 私よ!!

(チャールズ・M・シュルツ 『ピーナッツ』 1973.10.25)

① 偽ドラえもんの捏造

『こころ』の感想には、怪しげなものが少なくない。

たしか後に発表する『こころ』では他人の迷惑を考えずわがまま勝手にふるまう高等遊民たちに対する、漱石さんの意見を語っていたよ。

(『ドラえもんの学習シリーズ ドラえもんの国語おもしろ攻略 読書感想文が書ける』)

語っているのは偽ドラえもん。

「たしか」は「後に」ではなく、「語っていたよ」に係る。遠い。

「たしか」には、「自分の記憶によれば」（『広辞苑』「たしか」）という含意がある。偽ドラえもんは無責任だろう。記憶に頼らず、再読すべきだ。

「後に発表する」は無視。

「他人の迷惑を考えず」は意味不明。（「他人の迷惑」になるかもしれないなどは「考えず」）と補ってみよう。この場合、考えない理由がわからない。知能が低いのなら、そういう人を責めるのは酷だ。考えるゆとりがないのなら、情状酌量の余地がある。

「他人の迷惑を考えず」は、「他人の迷惑」になるとわかっていながら）などでないと、次に続かない。

「わがまま勝手にふるまう」人は悪い人だ。しかし、ある人のふるまいが他人から見て「わがまま勝手」のように思えたとしても、当人にはその人なりの事情があるのかもしれない。そうした事情を考慮しようとししない人は「わがまま勝手」だ。

ジャイアンだって、のび太やスネ夫の言動を「わがまま勝手」と感じるから怒るのだろう。

ギャンディーズは「わがままで意地悪だけど好きなの」（『年下の男の子』）と歌っていたよ。

「高等遊民」とは、今でいう〈ニート〉の一種。「高等遊民」という言葉は『こころ』に出てこない。偽ドラえもんは、『こころ』を『彼岸過迄』（夏目漱石）と混同しているらしい。

「漱石さん」と、「さん」付けはなれなれしい。

「漱石さんの意見」を偽ドラえもんは引用してくれない。

「漱石さん」が作中で「意見」や何かを語るなんて、ありえない。

② 文豪伝説の拡散

どんな分野でも、偽ドラえもんタイプの人はいることだろう。彼らは、有名人の名声を利用し、ガラクタ同然の自分の人生観や倫理観などを美化しようとする。お墨付き。水戸黄門の印籠。虎の威を借る狐。我田引水。「わがまま勝手」にこじつける。ところが、有名人の仕事そのものには敬意を払わない。偽ドラえもんの場合、『こころ』を再読しない。

『こころ』は意味不明なので、こじつけがやりやすい。だから、狡い偽ドラえもんどもに重宝がられてきた。（『こころ』は名作であり、その著者は文豪である）といった伝説は、偽ドラえもんどもによって拡散されたものに違いない。

この種の軽薄才子がいなければ、『こころ』はとっくの昔に忘れられていたはずだ。たまに思い出されるとしても、『浮雲』（二葉亭四迷）のような古臭い失敗した青春小説と同じようなものとして読まれていたことだろう。

ちなみに、文豪伝説を捏造したのは、この種の軽薄才子ではない。夏目宗徒だ。彼らは、『こころ』が意味不明であることを知っている。知っていながら、『こころ』を聖典として崇めてきた。（そこの凡人には理解できまいが、我々には感得できる）と脂下がるわけだ。

多くの宗教の信者は、自分にはよく理解できないからこそ、開祖の残した言葉を高尚なものとして有難がるようだ。夏目宗徒もその類だ。

③ 音読・精読・速読

読み方に三種あるとしよう。音読と精読と速読だ。意味不明の言葉を鵜呑みにして有難がる人を〈音読派〉と呼ぼう。その反対に、意味不明の言葉を警戒して疑い続ける人を〈精読派〉と呼ぼう。そして、何も信じようとせず、しかし、何も疑おうとせず、何もかも棄えていたみたい装う軽薄才子を〈速読派〉と呼ぼう。

5 / 7 「倫理的に生れた男」は意味不明

『こころ』には意味不明の言葉が満載だ。ところが、困ったことに、そうした言葉が辞書で引用してある。

倫理に関するさま。また、倫理にかなっているさま。

「一に許されない行為」「私は一に生れた男です。又一に育てられた男です〈漱石〉」

(『明鏡国語辞典』「りんり - てき【倫理的】」)

「倫理」の内容は、時代や集団によって異なる。だから、「倫理的に許されない行為」や「倫理にかなっているさま」の具体例は、当然、時代や集団によって異なる。

私の暗いというのは、固(もと)より倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。又倫理的に育てられた男です。その倫理上の考は、今の若い人と大分(だいぶ)違ったところがあるかも知れません。然しどう間違っても、私自身のものです。

(夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」二)

「私」とは、「先生」と呼ばれているSだ。

「暗い」は「暗い人世(じんせい)の影」(下二)から来ているが、この言葉も意味不明。「暗い」の被修飾語が決まらないからだ。「暗い人世(じんせい)」だと、意味不明。「暗い」「影」なら、無駄。「暗い」から「厭世(えんせい)的に」(下十二)を連想してわかったつもりになる人は、軽薄才子。

「固(もと)より」は意味不明。

「倫理的に暗い」は意味不明。〈倫理に暗い〉と誤読したくなる。誤読ではないのかもしれない。

「倫理的に生れた男」は意味不明。無意味だろう。

「倫理的に育てられた男」は〈「倫理的」な「男」になるように「育てられた」〉と作り替えてわかったつもりになれる。だが、Sの両親が教育熱心だった様子はない。むしろ、「寧

る鷹揚（おうよう）に育てられました」（下三）という。ただし、この「鷹揚」も意味不明。

「その倫理上の考」に関する典拠や徳目などについて、『こころ』では明示されていない。

「今の若い人と大分（だいぶ）違ったところがある」という言葉は、〈昔の「若い人と」ほとんど「違ったところ」はない〉という文を暗示している。この暗示された文は、『こころ』の内部の世界において、真実を語るものだろうか。そうではない。Sは、青年時代から変わり者で、孤立しがちだった。

「どう間違っても」は意味不明。誰が間違うのか。

〈「倫理上の考は」～「私自身のもの」〉というのは意味不明。常識的には、倫理は個人の「もの」ではない。

① 「倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで」

「倫理的に」の別の例。

この性分が倫理的に個人の行為やら動作の上に及んで、私は後来（こうらい）益（ますます）他（ひと）の徳義心を疑うようになったのだらうと思うのです。

（夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」三）

「この性分」とは「物を解きほどいて見たり、又ぐるぐる廻して眺めたりする癖」（下三）のことだが、意味不明。

〈「倫理的に」～「及んで」〉は意味不明。

「倫理」と「徳義」は違うらしい。どのように違うのだらう。不明。

② 関係妄想

「倫理」の隠された真意は〈関係妄想〉だらう。

「ひとが自分のうわさをしている」「自分をどうかしようとしている」などというように、実際には何でもない他人の言葉や周囲のできごとを自分に関係づける妄想。統合失調症患者で見られる。

（『広辞苑』「関係妄想」）

「実際には何でもない」ことかどうか、どうして他人にわかるのだらう。しかし、その疑問は棚上げ。

気が狂ったと思われても満足なのです。

（夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」五十六）

主語は、「先生」と呼ばれている「私」つまりSだ。

この文は、言うまでもなく、〈私は気が狂っていない〉という文を暗示している。この暗示された文は、『こころ』の内部の世界において、真実を語るものだろうか。怪しい。

③ 世界征服

私が本当に批判したいのは、『こころ』ではない。『明鏡国語辞典』でもない。本当に批判したいのは、「倫理的に生れた男」などという意味不明の言葉を意味のあるものとして読み流す人の全員だ。

近頃、〈倫理的〉とか〈エシカル〉とかいう言葉が濫用されている。この種の言葉を用いる場合、その言葉の出典を明示し、その出典の思想性などに関して万人とともに議論すべきだ。そうしないのは、なぜだろう。理由は二つしか考えられない。一つは、自分の属する集団の現時点における習慣しか知らないから。つまり、怠け者だからだ。もう一つは、自分の属する集団の現時点での習慣が絶対的であるように装いたいから。つまり、世界征服を企んでいるからだ。

6 / 7 隠蔽された「切ない恋」の物語

① 御嬢さんが僕を好きなんだ

『こころ』は虚偽の暗示によって成り立っている。

彼の重々しい口から、彼の御嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像して見て下さい。

(夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」三十六)

「彼」は「K」と呼ばれている青年だ。

「重々しい口」は意味不明。

「御嬢さん」の名は「静（しず）」（上九）という。

「彼の御嬢さんに対する切ない恋」の物語について、語り手である「私」つまりSは、微塵も語らない。

この場面は、漫画版では、次のようになっている。

「お嬢さんが好きなんだ」（バラエティ・アートワークス『こころ まんがで読破』）

「私はお嬢さんのことが愛しい」（小野進『こころ』）

（Kの台詞はない）（吉崎風『コミック版 こころ』）

「……実は 俺は…… お嬢さんに惚れているようだ」（『マンガで BUNGA KU こころ』）

「お嬢さんが好きだ どうしようもなく好きなのだ 気づけばいつもお嬢さんのことばかり考えている」（高橋ユキ『名著をマンガで！ ころろ』）

私の想像では、KはSに「お嬢さんが好きなんだ」と語ったのではない。〈お嬢さんが僕を好きなんだ〉と語ったのだ。

SとKが本音を軽々しく口にしたら、次のような展開になっていたろう。

K お嬢さんが僕を好きなんだ。誘われてフラフラ。

S お嬢さんが僕を好きなんだ。誘われてユラユラ。

静はKを好きだったのだろうか。不明。静はSを好きだったのだろうか。不明。静はSからKに乗り換えたのだろうか。なおさら不明。静は、Sを嫉妬させたくてKを「媒鳥（おとり）」（夏目漱石『彼岸過迄』『須永の話』三十一）として利用したのだろうか。不明。

② エロトマニア

『ころろ』の作者は、SとKの妄想の物語を隠蔽している。Sを「先生」と呼ぶ青年Pも同様の妄想を抱きやすいタイプらしい。彼らは「色情狂」（夏目漱石『行人』『友達』三十三）だろう。ただし、狂気の発現を抑えようとして苦しんでいる。

被愛妄想（エロトマニア）？

はい あまり一般的ではありませんが… ひらたく言ってしまえば「自分は意中の人から愛されている」と—— 誤認してしまう状態の事です

（中村卯月『被愛妄想』『彼女が僕を殺す理由（わけ）編』）

「切ない恋」は「被愛妄想」の症状だろう。

SはPに「私は淋（さび）しい人間です」（上七）と自己紹介する。意味不明。Pには理解できなかった。「淋（さび）しい」の隠蔽された意味は〈被愛妄想を抱きやすい人間〉とあったものだ。

③ 被愛妄想と被害妄想

夏目漱石のほとんどの小説の隠蔽された主題は被愛妄想だ。ただし、その被愛妄想は被害妄想と表裏一体になっている。被愛と被害の二種の妄想の主題が入り混じっているわけだ。作者はそれらを仕分けできない。そのせいで意味不明になっている。

作者は、作中人物の混乱した感情を文芸的に表現しているのではない。隠蔽しているのだ。隠蔽したまま、意味不明の文言によって本音を暗示するのに留めている。こういう暗示は、文芸的な技法ではない。メンタリストのD a i G oなどがお得意の灰めかしによる誘導の

一種だ。

7 / 7 「明治の精神」あるいは「馬鹿気た意地」

『ドラえもん』でいうと
「坊っちゃん」はスネ夫
「山嵐」はジャイアン
「マドンナ」は静香？

「先生」はスネ夫 のび太ではない
Kはジャイアン 出木杉ではない
静は静香？

夏目漱石はスネ夫
出来杉ではない
のび太でもない
ジャイアンかもしれないが
ドラえもんであるはずがない

『こころ』にドラえもんのひみつ道具
「心の声スピーカー」を装着すれば
「明治の精神」（下五十五）は
「馬鹿気た意地」（下九）に聞こえる
「明治の精神」は令和になっても継続中

〔補足〕

「明治の精神」とは、明治の俗語で「神経衰弱」（夏目漱石『現代日本の開化』）のこと。
令和の俗語なら〈ジカジョ〉か。勿論、そのものずばりではない。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御（ほうぎょ）になりました。その時私は明治の精神
が天皇に始まって天皇に終わったような気がしました。

（夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」五十五）

語り手の「私」は「先生」と呼ばれるSだ。Sが聞き手として想定しているのは、Sを「先生」と呼ぶPだ。SとPの間で「明治の精神」という言葉の意味が共有されていたかどうか、

不明。

「すると」は誤用。あるいは、「すると」で始まるはずの物語が流れた。

「夏の暑い盛り」は無駄な情報。

「明治の精神」という意味ありげではあるが意味不明の言葉は、ここで唐突に出てくる。

後でもう一度出てくるが、その文でも意味不明。

『こころ』という虚構の世界において、「明治の精神」という言葉が広く用いられていたかどうか、まったくわからない。また、『こころ』の外部の世界において、「明治の精神」という言葉が広く用いられていたかどうか、私は知らない。

「明治の精神」の類義語らしい文句なら、いくらでも見つかる。たとえば、「気取るとか虚栄とか」（下三十一）がそう。当時、「西洋風を気どること」（『明鏡国語辞典』「ハイカラ」）や、その逆の「わざと汚れた格好をして粗野にふるまうこと」（『明鏡国語辞典』「蛮カラ」）が流行だったらしい。「明治の精神」という言葉は、ハイカラさんにも蛮カラさんにも受けたことだろう。あざとい。

意味、ありそうで、ウッフン。なさそうで、ウッフン。黄色い嘴。

「明治の精神」なんて気障な言葉を用いるのが「明治の精神」という病気の症状だ。劣等感を隠蔽しながら優越性を仄めかすが、自己欺瞞に成功せず、いらつく。

「人間のどうする事も出来ない持って生れた軽薄」（上三十六）も「明治の精神」の類義語のようなものだ。「の」は〈には〉などが適当だが、「人間の」そのものが不要のはず。不要でないとしたら、これは〈ある種の「人間の」能力では〉などの不当な略だろう。語り手Pは、自分自身を含めたある種の「人間」に欠けている何かを隠蔽している。つまり、「軽薄」の反対語を隠蔽している。それは〈重厚〉ではない。「慈雨」（下四十）かもしれない。「軽薄」とは〈KY〉のことだろう。

「明治の精神が」は〈「明治の精神」の流行「が」〉などの不当な略だ。

「天皇に始まって天皇に終わった」は意味不明。Sは明治十年頃に生まれた。だから、慶応の風潮や何かを体験していない。また、語りの時点で明治は終わっていない。

「終わったような」は、〈「終わった」方がいい「ような」〉などの不当な略だ。

「気がしました」というのだから、実際には終わっていないわけだ。始まってもないのだろう。あるいは、神武天皇に始まっているのかもしれない。

（終）

『夏目漱石を読むという虚栄』予告

1 / 3 軽薄才子は根暗

『こころ』に関する私の批判をまとめて『夏目漱石を読むという虚栄』と題し、近く公開

する。

「みんな知ってる。でも読んだこと、ある？」

(『こころ まんがで読破』帯)

「でも読んだこと、ある？」を拡大解釈すると、「でも」ちゃんと「読んだこと、ある？」となる。

NHKの『こころ』の輪読会に参加した作家が〈読んだと思っていたが、読んでいなかった〉と告白した。しかし、彼の記憶違いだろう。若い頃に読んだことがあるのだが、ひどく誤読していたので、再読時にはまるで違う印象を得たのだろう。だから、〈読んでいなかったみたい〉とってしまったのだろう。

この作家とは逆に、若い頃の印象に固執する連中がいる。彼らを〈夏目宗徒〉と呼ぶ。彼らは決してちゃんと読まない。意味不明とわかってもお、文豪の高遠な哲学や何かがかめられていると思ひ込み、ありもしない意味を探し続ける。そして、捏造し続ける。

○

「欲しがりません、勝つまでは」という戦時中の標語がある。

これの真意は、理屈だと、〈負けます、欲しがれば〉だろう。しかし、発信者にそんな意図があろうはずはない。真意は、〈欲しがります、勝てたら〉でもない。〈欲しがりません、負けるまでは〉でもない。この標語は意味不明なのだ。

この標語は、負ける可能性を無根拠に排除するためにある。〈負けるものか〉ですらない。この標語は〈必勝〉を暗示しているが、〈必勝〉の根拠は示していない。つまり、虚偽を暗示している。

意味不明の文言によって暗示された情報の真偽は問えない。疑いようがない。信じるしかない。信じられなければ、あるいは信じたふりができなければ、〈馬鹿〉とか〈売国奴〉とかいった烙印を捺されてしまう。

会田誠推薦の『輝け！大東亜共栄圏』（駕籠真太郎）が参考になるかもしれない。

○

人々に悲惨な暮らしを強いるのは、権力者ではない。権力者と普通の人々の間には深い溝がある。それを軽薄才子どもが意味不明の文言によって埋めてくれる。批判できないような不合理な文句を拵える。キャチフレーズなどの中途半端な嘘に接した人々の判断力などは、しばしば、鈍ってしまう。少なくない人々が酔い痴れる。軽薄才子は権力者のための花道を準備するのだ。

詐欺師に騙されてしまうのは、仕方のないことだ。よくできた嘘を見破ることは困難だ。歴史はよくできた嘘だ。私たちは歴史家に騙されて暮らしている。

一方、騙されまいとすれば騙されるはずのない中途半端な嘘に騙されてしまう人々が少なからずいる。詩歌でも哲学でも宗教でもない、しかし、それらのどれとも思えそうな中途

半端な嘘に、騙されてしまう人々がいる。彼らは被害者であると同時に、共犯者でもある。

○

戦時中、「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」（下三十）と唱えて特攻を志願した少年がいたという。

これはKの台詞だが、意味不明。この台詞の真意を知っているのはKだけだ。彼はわざと真意を隠蔽し、我を張っている。彼は軽薄才子だ。ただし、根暗だ。〈根暗だから軽薄ではない〉などということはない。逆だ。根暗こそ軽薄才子の最後の姿なのだ。多岐亡羊。

さて、〈軽薄才子は悩むしかない〉といったことを、『こころ』の作者は表現しているのだろうか。表現する意図があるのだろうか。あるとしたら、あるいは、ないとしたら、その証拠は本文のどこに認められるのか。

人々は『こころ』をちゃんと読めているのか。

2 / 3 売れてらセブン

私が『こころ』の批判を始めたのは、次の文章を読んだせいだ。

つまり、夏目漱石が芥川龍之介にとって生涯の反復概念になった。そして夏目漱石は『心』の主人公を自殺させて、自分は自殺したわけではありませんが、芥川は私小説、あるいは自伝的作家というところまで自分を追い詰めていったあげくに、自分自身を死なせてしまうということで結末をつけることになったんだとかがえると、いってみれば、芥川の反復概念のいちばん大きな枠組みは漱石自身だった。しかも、作品だけじゃなくて、漱石の生きかた、そして幸不幸の閲歴、それら全部を含めて反復概念の基礎になっていたんだといえいえるんじゃないかとおもいます。

（吉本隆明『愛する作家たち』）

ひどい悪文なので、引用が正確か、心もとない。

指摘したい箇所は沢山あるが、特に駄目なのは「漱石自身だった」で終わっているところだ。〈「漱石自身だった」ということがわかってきます〉などと続けなければならない。ただし、このように形式を整えると、論旨が不明であることが明らかになる。「自身」は、誇張にしても、おかしい。「かがえ」ていることが不明確だから、形式的に不備な文になってしまったわけだ。逆に言うと、筋の通った書き方をしないから考えが途切れたのだ。ありきたりの拙い文とは違う。本人でさえ、説明も推敲もできまい。

「反復概念」とは〈猿真似〉のことらしい。意味不明の「反復概念」という言葉が暗示するのは『澄江堂主人』（山川直人）で描かれているような、夏目に対する芥川の精神的依存のようなことだろう。ただし、この漫画を、私は第二巻までしか読んでいない。

芥川にとって夏目は理想の父だった。だからこそ反抗の対象でもあった。依存と反抗の矛盾を処理できなかったことが芥川の自殺の一因になっている。あるいは、芥川がそのように

思っていた。

○

『愛する作家たち』で論じられているのは、太宰と宮沢と芥川だ。夏目は入っていない。吉本が夏目についてまとめた話を始めるのは、江藤淳の死後だ。

『夏目漱石を読むという虚栄』という題名は、『夏目漱石を読む』(吉本隆明)に由来する。吉本は、私が〈何四天王〉と呼ぶ夏目、芥川、宮沢、太宰のファンで、同様に私が〈慢語三兄弟〉と呼ぶうちの一人であり、なおかつ、他の二人、つまり、小林秀雄と江藤淳のファンでもある。彼ら七人を合わせて〈売れてらセブン〉と呼ぶ。この七人に共通する信念やイデオロギーのようなものはない。彼らの著作のすべてに目を通したわけではないが、通す必要はない。なぜなら、私が問題にしているのは、内容ではなく、文体だからだ。

乱暴に言い切ってしまうと、彼らに思想はない。控えめに言うと、私には彼らの思想が見出せない。〈独創的な思想がない〉ということではない。彼らの文章には確かな意味がない。確かな意味がないから、確かな内容つまり思想はない。だから、〈芥川はいいが、太宰はだめ〉とか、その逆。あるいは、〈小林はいいが、吉本はだめ〉とか、その逆。そんな批評は無駄口なのだ。

私が本当に批判したいのは、売れてらセブンであり、そのファンだ。追随者、模倣者、崇拜者などだ。さらには、悪文を名文として流通させている編集者だ。ポエムもどきの意味不明の文章を生徒に読ませて感心させたがる残酷な教員どもだ。

私はやつらを排除したい。勿論、物理的に排除するのは不可能だ。頭の中からやつらの影を排除するしかない。そのための手段として私は『こころ』を俎上に載せた。

○

ある作家の息子が十二歳で自殺した。死ぬ前、彼は『こころ』をむさぼるように読んでいたそうだ。父は、Kの真似をして死んだ息子が自慢らしい。彼は、Kを〈好人物〉と評する。〈好青年〉だったか。まあ、どっちでもいい。

3 / 3 検閲より校閲

『夏目漱石を読むという虚栄』は、まだ完成していない。予定としては四部構成になる。第一部は、『こころ』の普通のとは違う「意味」だ。第二部は「恐ろしく恐ろしげな「意味」と題し、夏目の他の文章を読んで、『こころ』に出てくる意味不明の言葉の意味を推理する。あるいは、その訓練をする。答えはない。答えがないことを示すのが目的だ。空しい仕事。第三部では「明治の精神」や「道」(下十九)について考える。そして、『こころ』のような意味不明のものを日本人が尊ぶ理由について考えてみる。曖昧な日本文化への批判。これが『夏目漱石を読むという虚栄』の真の目的だ。第四部は「検閲より校閲」と題し、重箱の隅をつつく。

この仕事をどう終わればいいのか、見当は付いている。しかし、いつ終わるか、見当もつかない。そのことに気づいて、微かだが、驚いた。そして、第一部だけでも公表しようと決心

した。

すると、数日後、こんな夢を見た。

○

薄暗い教室。物音はしない。生徒たちは三十人程度か。空席もある。彼らは机にテキストを広げ、顔を伏せている。テキストは『こころ』だろう。中年らしい男の教師が板書をしていて。私は「意味不明」と叫ぶ。気がつくと、黒板の文字の大半が消されている。狡い。残されているのは(20)や(26)などの括弧で括られた数字で、節の番号のようだ。年齢のようでもある。

「見せ消ちにすべきだった」と、私は抗議する。教師は、体をくねくねさせる。私の声に反応したのではない。チャップリンのように、顔を白黒に塗り分けている。みっともない。

いつからか、私は黒板の左端に立っている。日直だろうか。生徒らに背を向け、左手に何かを握り締めている。黒板消しのようだが、違う。縦半分が灰青色のポケット・ティッシュペーパーの袋のようだ。使いかけ。それを縦に二つ折りにし、握り込む。これを隠したいのだろうか。これが何の役に立つのだろうか。

教師はいない。私は机の間を歩きながら、「君たちは「先生」が好きなのかもしれないけど……」と言いつつ、徐々に気が抜ける。生徒らは動かない。彫像のようだ。ほとんど、あるいは全員が男子。詰襟の学生服の襟や袖口、皺の尾根などが、ぎらぎらと輝く。アルミ光沢。安っぽい輝き。

私ときたら、いつもこうだった。相手の選び方を間違う。卑下しすぎるせいだ。自分の想像する相手の考えに合わせて話を始める。わかりやすいように噛み砕いて説明してやろうと四苦八苦する。例え話が作り話になる。嘘も方便。語句さえ急造し、自分でも何を言っているのか、わからなくなる。そもそも何が言いたかったのか、そのことさえ忘れてしまう。お節介の気分が憎しみに変わる。いや、もともと憎かったのだ。教えたいというのは変えたいということで、変えたいというのは壊したいということで、壊したいというのは殺したいということだ。ああ、こいつらを消したい。なめてはいけない。子供でも、こいつらは敵なのだ。今は敵でなくても、きっと敵になる。相手が悪い。呑み込みが悪い。見込みがない。脈がない？ 死体のようだ。こっちのことを馬鹿にしきっている。腹は立たない。腹を立ててやるだけの価値もない。殺してやる価値もない。もう、飽き飽きだ。うんざりする。むなしい。薄笑い。

勝手に死にやがれ。

さて、何かを言おうとしたのだが、その気が失せてしまった。ある言葉を忘れたみたいだ。簡単な言葉のはずだが、思い出せない。思い出そうという気にもなれない。

おや、これは夢だな。では、覚めれば思い出せるか。

(2019・0428)

○

身を剥がすようにして目覚め、夢の中で言いたかったことを思い出そうとした。だが、思

い出せない。代りに、思い出したくないことを思い出してしまった。『こころ』批判を始めてから何度か思い出し、書いては消していたことだ。

○

君看雙眼色

不語似無憂

宴席で、老人がこんなものを示し、「わかるか」と来た。「揮毫を求められると、これを書くことにしている」と脂下がる。「わかる」と答えたら尊大だろう。「わからない」と答えたら馬鹿にされそうだ。「俺の目を見る 何にも言うな」(『兄弟仁義』)と歌えば激怒するか。

「眼は未開の状態にある」と書き添えた。フランス語で書けたら洒落てたろう。野狐禅は「またわけのわからんことを」と怒りながら笑いながら、きよろきよろ。

この野狐禅を、わざとらしく「先生」と呼んで慕う青年がいた。彼は『こころ』の熱狂的なファンで、風の便りによれば早死にしたそうだ。彼の兄は二十歳になるかならないかで自殺したそうだ。ある朝、兄がなかなか起きて来ないので、部屋を覗いた。灰色の窓ガラスを背景にして、黒い物体が下がっている。動かない。「そんな所で何をしているのか」と聞こうとして、すぐに何もしていないとわかった。自殺の動機は不明。自分は兄に捨てられたのだ。初めは、そう思った。やがて、兄を助けられなかったのだと、自分を責めるようになる。

『こころ』を読んで、兄をKに重ねた。また、「先生」みたいな年長者を求めるようになった。そんな彼からしつこく文豪伝説を聞かされ、私はうんざりしていた。あるとき、たまりかね、「夏目漱石は精神病だったのだよ」と言ってやった。読んだばかりのパトグラフィー関連の本の受け売りだ。彼の顔が強張った。しかし、すぐに気味の悪い笑みを浮かべた、わざとらしく。

「そんなことぐらい、誰でも知っている。我々は先生の暗い部分を隠蔽するために連帯しているのだ。そんなことも知らないのか」

○

むかしむかし、あるところに、一匹の……

もとい。

むかし、ベトナム戦争というのがあって、それが終わったか終ろうかしていた頃、つまり、世界の終りが始まった頃、あるところ、日本の典型的な地方都市、城があって寺社があって路面電車が走る繁華街の端っこ鉛筆ビルの地階に、ザボというジャズ喫茶があった。日差しのきつい通りを、一匹の私が歩いている。丸善で高い本を立ち読みし、申しわけのように文庫本などを買って、ザボに向かう。ジャズが好きだったわけではない。途中、脇道に入るとブルーノートというのがあったが、そこへは滅多に行かない。フリー・ジャズをかけないからか。三階にあって、上るのがつらかったからか。そうかもしれない。

上るのはつらい。下るのは楽、底が見えなくても。

肩に浅く刺さった陽光の矢がぷつぷつと抜け落ちるのを感じながら、狭く薄汚れた階段を下りる。

扉が開き、扉が閉じる。

暗い洞窟の奥から吹きつける不協和音。ザラザラッ、ザッ、ザラ。それを浴びて、やっと、
やっと……

入ってすぐ右が男女兼用の和式便所。三面の壁は落書きだらけだ。

その一つ。

「反戦自衛官よ、連体せよ！」

「連体」に矢が刺さっている。矢は撓い、山なり。矢筈に一文が下がる。

「連休の間違い？」

○

思い出した。

読者よ、校閲せよ！

武器は矢印。呪文はイミフ。

(終)